
雪風と氷結

黄昏れた人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪風と氷結

【Nコード】

N10291

【作者名】

黄昏れた人

【あらすじ】

未来から来てしまった、タバサの息子とジョゼットの息子が弟として、育っていく物語。しかもサイトがタバサに一目惚れ！タバサを中心としたオリジナルシナリオで書いています。

人物紹介（前書き）

設定はほとんどがオリジナルです。食い違う所がたくさんあると思いますが、そこはご了承ください。

設定を少し変更します。

キャラ設定を変えます。

人物紹介

・タバサ（シャルロット・エレーヌ・オルレアン）

15歳で風のトライアングル・クラスと、天才的な魔法の使い手で二つ名は

「雪風」。いつもは無表情だが弟の前では表情豊になり、明るい声で話し掛ける。昔誤ってヒロキを使い魔にしまったが本人達はあまり気にしてない。

・セリヌ

ガリア王ジョゼフの次女、幼い頃からオルレアン家で育ったため、従姉妹のタバサを本当の姉のように思っている。

オリジナルキャラ

・ヒロキ（本名不明）

2歳の時にオルレアン家に拾われた。名前は、手に付けていた鎖に「奴隷番号00ヒロキ」と書いてあったため付けられた。

10歳で風のスクウェア・クラスだがコントロール出来ないため、いつもはライン・クラスしか使わない。二つ名は

「氷結」。いつも明るく姉には甘えん坊である。実は体に何かが封印されているが、本人はそれを知らない。タバサに付けられた使い魔のルーンは両目にあったが、キッドが自分の肉体を取り戻したため、今は右目にルーンがある。能力は探索。

オリジナルキャラ

・キッド（本名不明）

ヒロキの中にあるもう一つの人格だが、ひよんな事に自分の肉体を取り戻す。しかし普通の肉体ではなく、いろいろな能力がある。火のライン・クラスで二つ名は

「獄炎」。杖の代わりに背に背負った大剣を杖として使う。

武術が優れていて、とくに剣術が優れている。タバサの弟ではあるが護衛という立場である。ヒロキの隠された秘密を知っており、オルレアン公夫妻に2人の秘密を話した。使い魔のルーンは左目で能力は先詠み。

・キュルケ（キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストー）

タバサの親友で、その弟のヒロキとも本当の姉弟のように仲がいい。火のトライアングルで、

「微熱のキュルケ」と呼ばれている。

・ルイズ（ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール）

キュルケとは、犬猿の仲。魔法が一度も成功したことがなく

「ゼロのルイズ」と呼ばれている。

・サイト（平賀才人）

現代社会に生まれた普通の高校生だったが、ルイズによって使い魔として召喚された。伝説の使い魔

「ガンダールヴ」のルーンが刻まれている。実はタバサに一目惚れしている。

第1話：噂の姉弟

トリステェン魔法学院には二つの噂がある。一つ目はゼロのルイズ、そして二つ目は蒼い髪の姉弟である。

タバサー side -

今日は、2年生に上がるための大切な使い魔召喚の儀式。さっきからいろんな使い魔が召喚されている。次は私の番

「我が名はタバサ。五つの力を司るペンタゴン。我に従いし使い魔を、ここに召喚せよ」

そして召喚されたのが風龍、見た感じでは200年位は生きてると思う。

次はあの子いったい何を召喚するんだろう・・・楽しむ

ヒロキー side -

お姉ちゃんは風龍を召喚したんだ・・・うゝなんか悔しい！
あ、次僕の番だ。

「我が名はヒロキ。五つの力を司るペンタゴン。我に従いし使い魔を、召喚せよ」

召喚されたのは、龍だけど・・・この龍見た事ない。ところ所に氷付いてるし色は・・・銀、かな？この龍なんだろう？とりあえず契約契約。

「嘘だろ・・・あれ氷龍じゃないか・・・」

「っ！おい氷龍って、この前遙か北の方で発見されたあの氷龍か！

？」

「マジかよ！だってあいつラインだろ？それなのに氷龍なんか召喚出来るのかよ！？」

むっ・・・ラインじゃないもん！でも、お姉ちゃんと約束してるから人には言えないし・・・

それにしてもキッドどこ行っただろう。次キッドの番なのに・・・いいや。お姉ちゃんのとこ行こうと

キッドーsideー

ふっんヒロキは氷龍か、流石だな。さてさてぼちぼち行きますか。

「我が名はキッド、五つの力を司るペンタゴン。我に従いし使い魔を、我がもとに召喚せよ」

ふむ。イフリートか、これはまた大物が掛かったな。

「あの姉弟なんなんだ。揃いも揃って大物を使い魔にするなんて」
「悔すぎる・・・」

さて儀式も終わったし寝るとするか、授業はでなくてもいいしな。

タバサーsideー

まさかイフリートに氷龍なんて、流石私の弟。

「お姉ちゃん」

「ん？どうしたの？ヒロキ」

「お姉ちゃん。ひょうりゅうって何？」

この子氷龍知らないんだ・・・

「氷龍はね、この前にずっと北の方に行っていた探索隊が、偶然見つけた龍なの、冷気を纏っていてブレスは氷のブレスなの、わかった？」

「うーん。なんとなく」

少しはわかったようだからいいか、そう思い私はヒロキを抱っこした。

「えへへ、んーお姉ちゃーん♪」

「本当に甘えん坊なのねーヒロキって、まー見てて和むから良いんだけどね」

どうやらキュルケが来ていたようだ。その後ろにはさつきキュルケが召喚したサラマンダーがいる。キュルケの実力から考えて相応しい使い魔だ。

ドカーン！！

「い、今の何？・・・」

ヒロキが怯えてる。今のはきつとルイズの魔法だろうけど、いきなりだったからびっくりしたのかな？

「大丈夫だよ。ヒロキ。今のはきつとルイズの仕業だから、ね？」

「うーん・・・お姉ちゃーん・グスツ・・・」

「大丈夫よ。いつもの事だから、てっゼロのルイズが平民を召喚してるわ」

泣きそうになっているヒロキを、落ち着かせながらルイズの方を見る

と確かに平民がいた。ここでは珍しい黒い髪に見慣れない服だ。

「アハハハ。流石はゼロのルイズね。期待を裏切らないわ」

キュルケは隣で、ルイズを見ながら笑っている。と言ってもクラスの全員が、ルイズを見ながら笑っている。契約もすんみたいだし教室に戻るらないといけない。

「ヒロキ、教室に行くから降りて」

「・・・もうちょっとだけ」

「だゝめ。また後で抱っこしてあげるから、ね？」

私がそう言っているとヒロキは、渋々私から降りて教室に向かって歩いた。

第2話：静かな夜

その日の夕方

タバサ side -

召喚の儀式が終わり授業をしたけど、ルイズの魔法で教室が、半壊したために授業は中止。

「お腹空いた・・・」

隣にいたヒロキがお腹を空かせたようだから、

「ん、じゃあ食堂に行く」

「はーい」

今はみんながいるのでいつものタバサを演じている。姉の顔になるのはヒロキと二人の時かキュルケとキッドの四人の時だけ、本当はずっと姉の顔で居たいけど・・・それはできない。

「お姉ちゃん、今日は何食べるの？」

「いつもの」

「ううゝたまには他の食べたい」

頬を膨らせて、かわいい・・・あっそうだ。

「ヒロキ、来て」

「?なに?」

人気のないところにヒロキを連れていく

「夏休暇にね、家に帰るの」

「帰るの？ 僕も？」

「そう、キュルケも来ると思うからね」

「は〜い」

話を終わして、食堂に向かいキュルケと合流して食事を取った後、部屋に戻った。

「ヒロキ、お姉ちゃん達お風呂入って来るからここで待ってて」

「え・・・や〜だ〜や〜だ〜」

泣きそうな顔で、私にしがみついて駄々をこねている。

「やだぁ・・・一人にしないでえヒグウツ・・・一人ぼっちやだぁ〜」

泣き出してしまった。昔の記憶を思い出させてしまった。

「ヒロキ・・・ごめんね・・・」

そう言ってヒロキを優しく抱きしめた。

キュルケーsideー

本当にいい姉弟ね。世界で1番いい姉弟じゃないかしら。

「タバサ、浴室の個室あるんだからヒロキと一緒に入ってあげたら？」

「え？」

あら、何ポカンとした顔してるのかしら。いつもあんなにいちやいちゃしてるんだからいいじゃない。

「・・・わかった。ヒロキ、一緒にお風呂入ろう」
「エグッ・・・うん」

さてと私もお風呂入ろうっと

タバサ―side―

ヒロキに嫌な思いをさせちゃった・・・お風呂入ったし今日は寝よう。

「ヒロキ、寝よう」

「はーい」

そう言っただけヒロキは、家から持ってきたお気に入りの毛布に身を包んだ。部屋はオールド・オスマンに頼みヒロキと一緒にしている。

「お姉ちゃん早く寝よう」

「ん、ちよっと待ってね」

ヒロキが拾われて八年がたった。最初の頃はずっと怯えていて少し大変だったけど、今はこんなにいい子になった。甘えん坊なのは仕方ないけど・・・

何故ヒロキが魔法を使えるのかは未だにわからずじまいだし・・・キッドが全てを父様母様に話したらしいけど・・・キッドはヒロキの事を何処まで知ってるんだろう。

「お姉ちゃん？」

「ん、なんでもない」

ベットに横になって毛布をかけた。いつもヒロキと向き合って寝ている。

「お休みなさい。お姉ちゃん」

「おやすみ。ヒロキ」

そう言って頭を優しく撫でて、そのまま眠った。

第3話：忙しい日々

これはいったいどういう状況なんだろう。

今から数日前

ルイズが召喚した使い魔、名前は確かサイトが、ギーシュと決闘している。それは別に構わない構わないけど、何故キッドがその決闘を何故止めている。

「何だよあんた」

「君、どういいうつもりだい？ 決闘に割って入るなんて」

その二人の間に、キッドの大剣が刺さっていて、その下には二つになった青銅のゴーレムが転がっている。キッドがちょうど決闘が始まる時に、投げたのだろう。

「決闘は禁止されている。それだけだ」

「それは貴族同士の決闘だろ？ 彼は平民だ、問題はない」

「ハア……これだから最近の貴族は……そうかい、それじゃ勝手にしな」

キッドは大剣を抜いて去っていった。キッドがいなくなったのを見計らって、決闘が始まった。私は途中でヒロキと一緒に部屋に戻ったから、よくわからないけど、どうやらルイズの使い魔が勝ったみたい。彼は三日間眠っていたようで、あの日から五日が過ぎた朝

「すう……すう……」

虚無の曜日の今日はずっと部屋で過ごす予定。

ベットで本を読んでいる私の隣でヒロキが寝ている。一回起こしたけど

「んゝ・ねむひゃゝい」って言ったから寝かせた。本当は寝ぼけた顔が可愛かったから寝かせただけ、今はよっくり本を

ガシャ！

「タバサ！出かけるわよ！」

ボコッ

「いったゝい！何するのよ！あつごめんなさい。静かにするから杖持たないでよ」

「んゝ・うるひゃい・」

「ヒロキそろそろ起きて」

寝ぼけ目を擦っている。やっぱり可愛い・・・そういえばキュルケが部屋に来てるけど何の用だろう。

「あつそうだ。タバサ、シルフィード貸して！」

「虚無の曜日」

「今日があなたにとってどんな日なのかは知ってるわ。私ね恋をしたの、でもヴァリエールと出かけたのよ、わかるでしょ！？」

「わからない」

ヒロキの髪、やっぱり撫でてて気持ちいい。

「ちょっと、人が話してる時にヒロキの頭撫でてないで聞きなさいよ！」

「ごめんなさい」

「まゝいいわよ。とにかくタバサ、シルフィード貸して！！シルフィードじゃなきゃ追いつけないのよ！」

なるほどと思った私はシルフィードを呼んで飛び乗った。

「お姉ちゃん、待って〜」

ヒロキは飛び乗れないから抱っこしてシルフィードに乗せる。

「どっち」

「慌ててたからよくわからないの」

シルフィードに探すように伝えて私は本を読む。ヒロキはキュルケに抱きしめられている。

町につくと、キュルケはルイズ達の後をつけて行き武器屋を出ていくのを見ると、その店に行き一番高い剣を購入して店を後にした。その夜に、ルイズの部屋に行った。

「何しに来たのかしら？ ツェルプストー」

「サイトにお似合いの武器があったからプレゼントしようと思って買って来たのよ」

「後をつけた訳ね」

キュルケとルイズが、言い争いをしていて、私はベットに座って本を読んでいて、ヒロキは私に寄り掛かって寝ている。サイトはニワトリの巣に座っている。

時折サイトが横目で私を見ているが気にしない。ついでに言うとき顔が赤い気がする。

「私ね、貴女の事だいつ嫌いな」

「気が合うわね。私も貴女が嫌いな」

「決闘よ！！！」

本を読んでいる間に話が進んでいたようだ。まさか決闘まで行くな
んて・・

「こら！うるせーぞ！馬鹿女ども！」

サイトの方から中年の男の声が聞こえた。もちろんサイトの声では
ない、いったい何処から・・・

「人が寝てるところ起こしやがって」

「・・・あ、あの・・・この剣、喋ってますけど」

「もしかして知性を持つ剣インテリジェンスソードじゃない？また
あんた珍しい物買ってきたわね」

「こんな剣なんて知らなかったのよ。すぐにでも返

「いいなこの剣」え？」

「良いじゃんしゃべる剣なんて面白いし、俺これにするは、俺は平
賀才人」

「俺はデルフリンガーだ。よろしくな新しい使い出よ」

結局ルイズが買った剣にしたので、キュルケは残念そうにルイズの
部屋を後にした後に私もヒロキを抱っこしてルイズ部屋を後にして
部屋に行く。

部屋に戻るとすぐヒロキをベットに寝かせた。

第4話…いろんな疑い、そして過去 前編

そして現在に至る。

ヒロキをベットに寝かせた瞬間、キュルケが部屋に入ってた。それはいいけど、なんだろう・・・すごい怖い顔してる。

「何？キュルケ」

「タバサ、貴女サイトに何かしたの？」

いきなり部屋に来たと思ったら
何を言い出すのこの人は

「何のこと？」

「何のことって、サイトが貴女に熱い視線を送っていたでしょう？」
「・・・」

私の事を見ていたのは間違いない。でもそんなに熱い視線とは思わない。それに、キュルケも喧嘩しながらよくわかったと思う。

「タバサ、たぶんサイトはあなたに惚れてるわよ？そのうち告白されるんじゃないかしら♪」

「・・・興味がない」

今の私は、恋愛に興味はがない。そんな暇はもちろんないし、私が恋に走ればヒロキが拗ねてしまう。

「それと、聞きたいことがあるのよタバサ」

「何？」

「ヒロキとキッドについてよ。前から思ってたけど、あなたたち本当の姉弟じゃないでしょ？」

キウルケが鋭いのは知っている、まさかそこまで鋭いなんて思わなかった。そろそろ話さないといけないのかな、この子達のこと。キウルケになら話してもいいけど、どうしよう。

「ん・ん」

「タバサ、ヒロキ起きたわよ」

寝るの早かったのかな？ すごく寝惚けた顔してるし・・・可愛い

「ん？ あっママ」

「へ？ ママ？」

学院では言わないって約束なのに、どうして私がママなんだろう？ 私の背中に抱きついて、後でちゃんと叱ろう。キッドはヒロキが、私のことママって呼ぶ訳を知ってるのかな・・・

「タバサ、説明してもらおうかしら。どうしてヒロキが、貴女の事“ママ”って呼ぶの？」

「わかった。話す。ヒロキはもともと私の弟じゃない、8年前に私の家がヒロキを拾ったの」

「拾った？ ヒロキを？」

「そう」

8年前

ガリア・オルレアン邸—side—
ザー

「今日は酷い雨だな」

「だな、シャルロット様とセリヌ様が“外で遊べない”って言うってたしな」

「仕方ないさこんな酷い雨な・ん？」

「どうした？ん、あれは・おい！大丈夫か！」

門から少し歩いたところに子供が倒れていたのだ。憲兵はすぐに子供に駆け寄り、息を確認して子供を抱き上げた。

「まだ息はある。とりあえず部屋に運ぼう。俺は、旦那様に急いで伝える」

「そうだな。俺は医者を呼んでくる」

そう言って、一人の憲兵は医者呼びにいつて、もう一人は子供を抱えて屋敷に向かった。

ガチャ！！

「旦那様！門の前にこの子供が倒れておりました！」

「なんだって！？まだ幼い子供じゃないか、早く部屋に運んで手当てしなさい！」

「はい、後この子の近くにこんなものが」

それは、貴族が使うスタッフ型の杖、シャルロットが使うのと同様同じ形をしている。

「これは・・・これは私が預かろう。ひとまずこの子を部屋へ運びなさい」

「はい、しかしまず体を洗ってからじゃないと、ベットが汚れてしまいますので」

「そうか、わかった。早めにベットに寝かせてあげなさい」

「はい」

そう言って憲兵は、浴場に子供を連れて行った。

第5話：いろんな疑い、そして過去 後編（前書き）

投稿するのに、遅くなりました。

今回は、いままでよりも長くなってしまいました。

第5話…いろんな疑い、そして過去 後編

浴室に向かった憲兵を後にして、オルレアン公は部屋に行き、夫人に倒れていた子供の話しをした。

「本当なの？ シャルロットと同じ杖を持っていたって？」

「ああ、本当だよ。これが、その杖だ」

オルレアン公は、憲兵から預かった杖をテーブルの上に置いた。

「確かに、シャルロットの杖にそっくりだけど・・・色が違うんじゃないかしら？ シャルロットの杖は青いけど、この杖は白いわよ」

「たしかにね。でもこの杖は、ほかの杖と違って1本しかないんだよ。父さんからもらった杖だしね」

「確かにそうね。これについては、本人に聞いたほうが早いんだけど・・・今は寝かせといたほうがいいわね」

「そうだね」

そう言ってオルレアン公夫妻は、お茶を飲みながら、しばし休んでいた。

コンコンッ

「旦那様、お医者様がお見えになりました。今は子供を見てもらっております」

「そうか。後で私も行こう」

「君も来るかい？」

「ええ」

そう言ってオルレアン公夫妻は、部屋を出て子供が入る部屋に向か

った。その後ろには、青い髪の姉妹がいた。オルレアン公夫妻の子供、シャルロットとジョゼフの娘のセリヌである。

「父様達どうしたのかしら・・・子供がどうこうって・・・」

「お姉さま、やめようよ。父様と母様に怒られちゃうよ」

「それならセリヌは、部屋に戻ってもいいんだよ？」

「それなら私は部屋に戻ります。お姉さま！怒られても知らないからね！」

部屋に戻っていったセリヌを後にしてシャルロットは、親の後を付いて行った。

オルレアン公夫妻が部屋に行くと、ちょうど部屋から医者が出てきた。

「おおこれはこれはシャルル様」

「来て頂いてありがとうございます。それであの子供は・・・」

「あの子は心配いりません。しかし、相当疲れていたのでしょうか起きる気配がないのです」

「そうですか」

「あと、辛い生活を送っていたのでしよう。私が触れた途端に脅えたかの様に魘されだしたのです。それに手首に付いていた鎖には、奴隷と刻まれておりました」

それを聞いたオルレアン公はひどく驚いた顔をした。

「奴隷だって・・・今は奴隷は禁じられているのに・・・」

「そうですね。さて私は帰らせていただきます」

「ああそうですね。では家まで送らせませす」

「それはそれは、ありがとうございます」

医者を送りだしたあと、オルレアン公夫妻は部屋の中に入っていた。そして子供が寝ているベットに近づいた。

「まだこんな幼い子が奴隷だなんて・・・シャルロット達よりも幼いのに・・・」

「見たところだと2歳ってところだね。手首の鎖は切っておこう。もう、奴隷にはさせないようにね」

そう言ってオルレアン公は子供の手を取り、手首に付いている鎖を切り取った。その瞬間に子供の髪が光り、色が変わり、顔つきも変わった。

変わったその髪の色を見て、オルレアン公夫妻は、目を見開いて驚いた。

「この髪の色は、ガリア王家の・・・」

「この鎖にフェイスチェンジの魔法がかかっていたのね・・・」

「そうか、でもいったい誰の子なんだろうね。この子の母親はいたい・・・」

「今は寝かせてあげましょう。目が覚めてから聞いても遅くわないわ」

そう言って夫妻は部屋を後にした。その夫妻の後ろの柱の影には、シャルロットが隠れていた。

シャルロットーsideー

「父様達何してるんだろう？あの部屋に何かあるのかな？」

私は興味本位で、部屋に入りベットに近づいた。そして、ベットに寝ている子供を見つけた。

「ん？なんだろこの子。あ、かわいい寝顔♪」

眠っていた子供に、興味がでた。私と同じ青い髪をした、この子供に父様達は何のようだったんだろう？

「ああ・・・や・・・だ・・・」

「・・・え？」

「や・・・だ・・・ママ・・・ママー・・・」

「魘されて・・・かわいそう・・・」

私は、そつと頭を撫でながら子守唄を歌った。よく母様が私にしてくれる子守唄を

謎の子供—side—

この歌・・・聴いたことある。ママが歌ってくれた歌、ママ近くにいるの？会いたいよ・・・

シャルロット—side—

目を覚ましたのか、そつと目を開けてこっちを見てる。

「・・・マ・・・マ・・・？」

私はこの子のママじゃないけど、言わないとこの子が悲しんじゃう。嘘ついてもいいよね？父様。

偶然文字にが彫られた鎖を見つけた。「奴隷番号00ヒロキ」これが名前かな？

「何？ヒロキ」

私は今まで出したことのないような優しい声で、寝ている子供に話

しかけた。

「ママ・・マ〜マ〜・・・」

「よしよし」

現在

キュルケーsideー

驚いた。ヒロキが奴隷だったなんて。タバサが歌った、子守唄を聞いて、‘ママ’ って言ってきたなんて色々と気になるわね。

「マ〜マ、マ〜マ、ん〜♪」

「こらっ」

「うう〜」

頬擦りなんかしちゃって、さっきは頬にキスまでしてたわね。本当に仲がいいんだから、私もヒロキの過去こともっと知りたいけど、今日はもういいわね。

「それじゃ私は失礼するわ。話してくれてありがとうタバサ。それじゃおやすみー」

「ん、おやすみなさい」

「あやすみ、キュルケお姉ちゃん」

私はタバサの部屋を後にした。これからもっとあの二人のことが気になる。でもキッドの話が出なかったのが気になるけど・・・いまはいつか、また今度聞こうっと。

タバサーsideー

キュルケにヒロキのことは、話したけどキッドのことは私は話せない・・・

「ママ、寝よう」

でもその前に・・・

「ヒロキ？約束したよね。学院ではママって呼ばないって」

「うっ・・・だって」

「だってじゃない。約束破ったから今日は背中合わせで寝るからね」

「えっヤダヤダヤダ！ごめんなさい！もう学院で言わないから！！だからお願い！お姉ちゃん！」

約束破ったのに、泣きそうな顔でお願いされると、どうしても許してしまいそうになるのが私。

「今度破ったら許さないからね」

「はい・・・」

しゅんっとしてしまったヒロキの頭を、優しく撫でてベットに入りいつもどおりに眠った。

第6話：サイトの修行、キッドの秘密

サイトー sideー

毎朝起きて、まずやることはルイズの衣類の洗濯。最初は怒られてばかりだったが、今はそれほど怒られない。洗濯をしたあとは時間が空くので、デルフで素振りをする。

「相棒ー、毎日性が出るねー」

「いいじゃねーか、どうせ暇なんだから」

そう言って会話しながら素振りをしている。デルフに指導されながらすることもしばしば。

「なゝ相棒ー、本当に暇でやってるのかい？俺にはそう見えねーが」

「はあ？じゃどう見えるってんだよデルフ」

「好きな女のためとか」

「ぶっ！！」

なっとななななな！！何を言い出すんだこいつは！俺は断じてそんなことの為ではないぞ！！

「相棒認めちまえよ。青い髪メガネの娘っ子に惚れたんだろ？」

「なっなんでそれを・・・」

「見てればわかるってーの。相棒も恥ずかしがりやだねー。いい加減告白したらどうだい？」

「な、おま、ここに、告白なんて・・・まだそんなことしねーよ！」

「まだって事は、いつかはするんだな？相棒」

しまった。墓穴掘ったー！！！！ちくちよう・・・デルフに見抜か

れるなんて思わなかった・

「ん？あそこにいるのは、確かキッドとか言う坊主だな」

「え？」

デルフの言う方向を見ると、身の丈ほどの大剣を片手で持っている青い髪の男がいた。

キッドーsideー

毎朝起きて、これをやるのが習慣になった。スキルニルを自分にして自分と手合わせをする、それが毎朝の習慣。しかし・・・俺からは血がそんなに出ないからあまり使いたくはない・・・手合わせも終わったところだし戻るとするか。

「おう坊主」

突然後ろから声がした。俺は、癖で剣を構えて後ろを向いた。

「ちょ、ちょっとたんま俺だ。俺！」

「なんだお前か、何の用だ」

「いや・・・別に用はないけど・・・」

「話し掛けたのは俺だ。オメエも、練習かい？」

話し掛けてきたのはデルフリンガーか、

「ああ、毎日練習はしている。そうしないと腕が鈍るからな」

「そうかい。オメエ見るかぎり相当の腕だな。どこかの隊長でも勤めてるのか？」

変なところに鋭い剣だな、流石はガンダールヴの左手だな。

「お前達のような弱い奴らに、話す事はない。とっとと帰ってくれ。練習の邪魔だ」

「坊主・・・今のは聞き捨てならねえな」

「事実を言っただけだ。今のそいつは弱い、違うのか？」

そこまで言うのとデルフリンガーは、何も言わなくなった。しかし、サイトは肩を震わせている。少し言い過ぎたか・・・

サイトー sideー

さっきから聞いてりや言いたい事言いやがって!!!!

「おい！」

「ん？」

「さっきから聞いてりや！お前より俺が弱いみたいな言い方しやがって!!!!」

「事実を述べたまでだ。なんなら、試してみるか？」

「おう。やってやる！」

絶対に勝ってやる!!そして・・・

「言っておくが、俺に勝てなきゃ姉上はやらんぞ」

「なっ！」

「気づかないと思ったか？とっくに気づいてるよ。もっとも、姉上は気づいていないようだがな」

「お、俺が勝てばいいんだな」

「勝てれば、の話だ」

勝ってやる！絶対に！

「来るならさっさと来い。ザコ」

「ザコだと！つてめえええええ！！！！」

キッドーseidー

簡単に吊られるやつだな。自分の実力を思い知らせてやる。この力を使わないといけないことはないだろ。

「お前の攻撃なんざあたらんよ。ナイフ一本で十分だ」

「なめやがって！その減らず口塞いでやる！！！！」

「できるのならな」

ガンダールヴの力があるから、やはり早いな。しかし・・・

ガギッ！

「遅い」

「くっ」

「その程度じゃ俺には勝てない！」

「ぐっ！・・・くっそー！」

サバイバルナイフで十分だな本当に

「おい！お前の体どうなってやがる！なんで魔鉄で、できてんだ！」

「デルフ、どうしたんだよいきなり」

今の一撃わかったのか、インテリジェンスソードも、だてじゃないな。

「よく一撃でわかったな。そうだ、俺の体は魔鉄でできてる」

「おいデルフ、魔鉄ってなんだよ」

「魔鉄ってのは、土のメイジが作りだす鉄のことだ。その鉄は特殊でな、加工すればいくつもの武器になる鉄だ。だが体を作るなんざ

聞いたことがねえ」

「あたりまえだ。これは、俺が独自に開発した魔鉄だからな、ほかの奴等には作れない代物だ」

「いったい、その体にどれだけの武器が入ってんだ？」

「知ってどうする。どの道お前たちは俺には勝てない」

話しすぎると厄介になる。そろそろけりをつけるか。

「そろそろ終わりにしてやるよ。完璧な敗北を味わえ」

サイトーseidー

今の話はよくわかんなかったけど、とにかく人ではありえない体をしているってことか。

「完璧な敗北？そんなものあるものか！」

「好きに言ってる。どうせ負けるんだ」

ボコボコッ

「なっ！」

いきなり奴の持っていたナイフが沸騰した水のようにボコボコしました。そのまま体に入っていくだと・・・

「どこ見てる」

「えっ・・・」

ドン！！！！

「ガハッ！！！」

いつの間にここまで来た・・・くそ・・・意識が・・・

キッドーseidー

「おい相棒！」

「氣を失っただけだ。心配しなくてもすぐ起きる」

これでいい葉になっただろう。これだけでも置いていってやるか。

「おい坊主、それはいったいなんでい。スキルニルか？」

「これは騎士の訓練用のスキルニルだ。自分の実力に応じて訓練ができる。今ガリアで、騎士の訓練はこれでやっている。そいつにもこれで訓練するように言ってくれ」

「わかったが、なんでお前さんは相棒にそんなに厳しいんだ？」

「氣のせいだ。俺はもう行く」

キュルケーseidー

「あの馬鹿！あそこまでしなくてもいいじゃないの！」

まったくタバサの弟だからってあそこまでやる必要ないでしょうに・

「何やってるのよキュルケ」

「げっルイズ」

「何よ！そんなやばい物を見たような目で見ないでよ！！それより、何見てるのよ？」

「え！・・・それはえっと・・・サイトの剣の練習してたから少し見てたのよ」

「そう・・・あなたはサイトがタバサに恋してるの知ってるんでしょ？」

そう・・・ルイズも気づいていたのね。

「知ってるわよ。サイトったら隠さないんだもの。あなたはサイトを応援するの？」

「ええ・無理やりこっちに召喚した酬いとして応援はするわよ」

「あら、あなたにしちゃ珍しいわね。熱でもあるの？」

「熱なんてないわよ！失礼ね！本気で応援するのよ！」

少し言い過ぎたかしら？

「あ、ルイズ、サイトが起きたわよ」

「えっ？あ、サイト！」

サイトーseedー

どのくらい気を失ったんだろう。くっそー体いてー

「サイト！大丈夫？」

「えっルイズどうしてここにいるんだ？」

「今の・見てたのよ」

情けないとこ見られたな・・・

「サイト、私は応援してるから」

「え？何を・・・」

「はぁーいつまで惚けるつもり？あなたが、タバサに惚れてることぐらいばれてるのよ？」

「え・・・そうなのか？」

やばい、今の俺の顔真っ赤かも・・・

「おい相棒、そこにある人形拾いな。さっき、坊主が相棒にって置

「いてったんだ」

「なんだこれ？」

「それはスキルニルってんだ。その人形に血を一滴垂らすと、その人になるマジックアイテムさ。しかしそれは、あの坊主が作った特注品だそうだ。使い方は、後でおしえてやるよ相棒」

「わかった・・・俺はあいつに絶対勝つ、絶対だ」

必ず勝ってやる。今度こそ！

第7話：帰省（前書き）

人物設定を変えましたので、人物紹介の内容を変更しました。

三ヶ月も載せていませんでした、すみません

第7話：帰省

キュルケー sideー

今日から夏休暇だけど、やることないのよねー

男子からのデートのお誘いも、そろそろ飽きてきたし、ほんとに暇ねー

タバサの部屋にでも行こうかしら。

コンコンッ

「タバサー居るー？」

「ん？」

「あっキュルケお姉ちゃん」

あら、身支度なんかして。どこかに出かけるのかしら？

「どこかに出かけるんの？」

「今から実家に帰る」

帰省するのねー。

タバサの実家か……

「ねータバサ？」

「かまわない」

「えっ私まだ何も言ってないわよ？」

「一緒に行きたいって言いたいの、わかる」

「キュルケお姉ちゃんも行こー♪」

はあーバレバレってわけね。ヒロキもこんなに目を輝かせて……
可愛いわねー♪

「お見通しってわけね。それじゃ私、準備してくるわね」
「わかった」

さてと、急いで準備しなきゃね。

タバサー side—

キュルケが準備しに行ったし、準備終わったから馬車に行こう。

「ヒロキ、準備終わった？」

「おわった」

「じゃ馬車に行こう」

「はい」

馬車に行く途中に、キュルケのどこに行って行かなきゃ。

コンコンッ

「キュルケ、準備できた？」

「あ、後少しだからちょっと待ってて」

「早く〜早く〜」

早く帰りたいのかな？

私の袖を引っ張ったりして、かわいい……

「終わったわよう。さ、早く行きましょう」

「馬車は校門にある」

荷物を、持って馬車に向かう。

ヒロキは、まるでピクニックに行くかのように、楽しそうだ。
きつと母様に、会えるからだろうけど…

キュルケー sideー

馬車に荷物も載せたし、あゝ楽しみねータバサの家。
あら、あそこにいるのはルイズにダーリンじゃない。

「あらルイズ。全然見ないから、もうとっくに帰省したのかと思っ
た」

「用事があって、少し出かけてただけよ。貴女達は帰省組？」

「そうよ。今からタバサの実家に遊びに行くの」

「タバサの？」

私が話してる間、サイトは少し顔を、赤くしながらタバサだけを見
てるし。

そんなに好きなのね：

「キュルケ、そろそろ行く」

「あ、わかったわ。それじゃルイズ、ダーリンまたねー」

馬車に乗ってから1時間は経ったかしら？
それにしても、ヒロキは楽しそうね。

「♪~~~~♪~~~~」

「あら、楽しそうねヒロキ」

「だって、お母さんに会えるもん♪」

ん？タバサの事はママって呼ぶけど、母親の事は、お母さんって呼
ぶのね。

「あら、すぐ側にママがいるじゃない」

「う……なんで知ってるの？」

「この前、ヒロキが寝ぼけて私の事ママって呼んだの」
「あうう………」

少し恥ずかしそうにしているヒロキを見ると、ちよっとお持ち帰りしたいわね…

「あれ？　そういえばキッドは？」

「キッドは、先に帰ったよ。ヴァルに乗ってた」
「ヴァルって？」

「ヒロキの使い魔」

「あゝあの銀の氷龍ね。ヴァルって名前なのね」

「え？　ヴァルは銀じゃなくて、白だよ？」

え？　でも、召喚したときは銀だったわよね。

「召喚したときに、ヴァルの体に氷が付いてて、光が反射したから、銀に見えたの」

「へーそうなの」

氷が付いてたのね、それなら納得がいくわね。

タバサー sideー

ヒロキとキュルケが楽しそうに喋ってる。

そういえばキッドは、なんであんなに早く帰ったんだろう？　任務でも、あったのかな？

「お姉ちゃん、お腹空いた」

「そういえば、そろそろお昼ね」

「実家まで、まだ少し時間があるからご飯にする。あとヒロキ、も

うママって呼んでもいいよ」

ヒロキは、少し驚いた顔したけど、もうキュルケに隠す必要ないし。

「いいの？」

「いいよ、ヒロキ」

「ママ！」

凄く喜んだ顔で、抱き着いて来た。

「ママ、ママ♪」

「ほらご飯にするから、離れなさい」

「ううう…」

「後で抱っこしてあげるから。キュルケ、隣のバスケット取って」

「ん？あ、これね。はい」

バスケットには、あらかじめ作らせておいた、サンドイッチが入ってる。それを取って、ヒロキとキュルケに配る。

キュルケ—side—

やっぱり学院の料理は、おいしいわね。サンドイッチでも、そこらの物とは違うわね。

ヒロキは眠くなって、タバサに抱かれてるし、それにしても……

「ねータバサ。ヒロキって身長いくつなの？130はないみたいだけど」

「今の身長は……ヒロキ？今身長いくつ？」

「今？今は110センチ」

110センチって相当伸びてないのね……。タバサからしたら、抱

っこしやすいんだろうけど。

「すーすー」

「……」

あらあら寝ちゃったのね。タバサの雰囲気は、本当の母親って感じね。さてと、それじゃ本題に…

「ねータバサいくつか聞きたいことあるんだけど？」

「何？」

「まずは、あなたの本名とヒロキの本当のクラス」

少し困った顔してるけど、話してもらわないと。

「私の本名は、シャルロット。シャルロット・エレーヌ・オルレア
ン」

「オルレアンって、王族の！？あわあわ、私ったら王族になんてこ
とを」

「王族とか関係ない。私は私」

「そう。ありがとう、シャルロット」

「うん」

まさか、王族だなんて思わなかったわ。ほんとうにビックリしたわ…

「ヒロキは本当はスクウェアクラスなんだけど、制御できないから
ラインクラスの魔法しか使わないの」

「スクウェアって…あなた達は本当にすごいわね」

「あと、ヒロキは自分で作った、2つの魔法がある。アブソリュ
ートとアイシクルビット」

ヒロキが自分で作った魔法？自分で魔法を作るのは、それなりの努力と才能がないとできないし：

「でも、アブソリュートは危険すぎる」

「そうなの？」

「一歩間違えれば、自分が凍る。あと、なぜかアイシクルビットは、この子うまく使えないの」

「え？自分で作った魔法なのに？」

「そのかわり、私の方がうまく使える」

いったいどんな魔法なのかしら。見てみたいけど、かなり危険みたいだし、今度見せてもらいましょうかしら。

「そろそろ到着いたします」

やっと到着ね。いったいどんな家族なのかしら。

タバサー side—

やっと着くんだ。ヒロキ起こさないで。

「ヒロキ、起きて」

「んゝゝ着いたの？」

「もうすぐ着くから」

眠そうな顔して、目を擦っている。そのあと私の眼鏡をとって：

「こら、返しなさい」

「いいじゃん、ママ眼鏡無くても見えるんだから」

はあ。仕方ないな・・・

「え、そうなの？タバサ」

「この眼鏡は、度が入ってない。もともと私、目悪くないから」

私の眼鏡を掛けて遊んでいるヒロキの頭を、撫でながら話をして
いると、馬車が止まった。家に着いたようだ。

セリヌーsideー

もうすぐヒロキが帰って来る。まだかな・・・

「少し落ち着いたらどう？セリヌ」

「だって、半年も会ってないんですよ？叔母様は会いたくないんですか？」

叔母のオルレアン夫人と、こんな話をしながら姉様とヒロキの帰りを待っている。

そういえば、明日は満月だっけ？ふふふ・・・

「奥様、お嬢様が到着致しました」

「ええ。わかったわ。セリヌ、行きましょう」

「はい、叔母様」

久しぶりにヒロキに会える。

キュルケーsideー

ここがタバサのお屋敷ね。さすが王族のお屋敷ね・・・。

「お帰りなさいませ、シャルロット様、ヒロキ様。奥様とセリヌ様
がお待ちかねでございます。ところで、そちらの方は？」

「彼女は私の親友。手紙に何度か書いたと思うけど」

「ああ。そちらの方が、キュルケ様でしたか。お嬢様の手紙で存じ上げております。ようこそお越しいただきました」タバサが手紙で、私のことを書いてくれてたなんて嬉しいわね。

「ママ、早く行こう」

「わかった。ペルスラン、荷物をお願い」

「かしこまりました」

それにしても、一体どんな家族なのかしら。

タバサ side—

扉を開けた瞬間にヒロキは、走っていった。

「ヒロキったら、走らなくてもいいのに・・・」

「久しぶりに会うんだもの。待ちきれないのよ」

そうだけど・・・

それにしても、セリヌは相変わらずここにいるんだ・・・

そう思っていると、すごく幸せそうな顔をした、ヒロキを抱っこした母様が歩いて来た。

「お帰りなさい。シャルロット」

「お帰りなさいお姉様」

「ただいま戻りました。母様。こちらが私の親友のキュルケです」

「お初にお目にかかります。キュルケ・フォン・ツェルプストーと申します」

「貴女がキュルケさんね。シャルロットの手紙に書いてあった通りの美人ね。ここで、立ち話もあれだから部屋に行きましょう」

母様と話しをして、部屋に行く。これからゆっくり休める。

第8話：極秘任務

キッドーsideー

バサッバサッ

家を出て1時間か、姉上達は着いたのだろうか。まだガリアの空を飛んでるがあと少しで海の上になる。

「そろそろ海か、ヴァルそろそろ喋ったらどうだ？封印されし龍」
「・・・気づいてたのね」

声ははじめて聞いたが、まさかメスだとは・・・

「ちょっと、何驚いた顔してるのよ。まさかオスだと思ってたなんて言わないわよね」

「すまん、その通りだ」

「まったく失礼しちゃうわ。いつから気づいてたの？私が主に封印されていたなんて」

「召喚の儀式の翌朝だ。氷龍なんて『こっち』には存在しないからな、存在するのは『あっち』のお前のような『作られし存在』だけだ」

そう、こいつはキマイラと同じ技術で作られた龍だ。『こっち』に存在するはずがない。

「そういえば、いつお前の封印が解けた。他の奴らも封印が解けたのか？」

「封印が解けたのは『こっち』に飛ばされたときよ。解けたと言っても一時的なもので、私しか解けてないのよ。あと、島が見えてき

たけど目的地はあそこでいいの？」

「ああ、あそこが目的地だ。正確には、あそこにあるセント・マルガリタ修道院だ」

そう、あそこには・・・母様がいるんだ。父上に頼まれた任務とはいえ、複雑な気持ちだな。

「そろそろ着くから、私は黙らせてもらおうよ」

「わかった。入り口の前に止まってくれ」

「ぐるる」

そうヴァルに言って、入り口の前に着陸して扉をノックして修道院の中に入った。

「珍しいですね。このようなところに人が来るなんて、何か御用ですか？」

「あなたが修道長ですね。これを」

「何ですかこれは？・・・これは！王家の印！」

そう言って修道長は焦った様子で手紙を読んで、その手紙を懐にしまった。

「わかりました。しかし、私もどの子なのかわかりませんので全員集めたほうがよろしいですね」

「そうですね。それから一人ずつ見ていくことにしましょう。それから、私はしばらくここに居させてもらいますので、そのことは理解してください。ああ、あと外に居る龍もお願ひしますね」

あの手紙に書いてあった内容は、姉上の双子の妹を修道院から連れて帰ること、期限は10日間。

「わかりました。王家からの指示でしたらいたし方ありません。それでは、彼女達を連れてきます」

それからしばらくして、修道長が修道女を連れて来た。

「突然の事ですみません。皆様のなかで一人だけなのですが、ご両親に連れて帰ってくるように言われました」

「父さんと母さんが？」

「そうです」

一人の少女が質問して答えると、周りの少女たちは少し嬉しそうな悲しそうな顔をしていた。

無理もない。両親の元へ行くと言う事は、ここを離れ皆と別れになるからな。

「それではお一人ずつこの部屋に入ってきてもらいます。少し質問等ありますから」

そう言って、俺は部屋に入った。それから少しして一人の少女が入ってきた。

「失礼ですがお名前は？」

「ジューネといいます」

「そうですか。ではジューネさん、その首にかけている聖具を外してもらってもいいですか？」

「え、外さないと駄目なんですか？これは掟で一度も外したことがないので……」

やっぱりか、これは少し骨が折れる作業かもな。

「その許可は修道長に獲ています。ですから、どうかお願いします」
「わかりました」

こんなやり取りを数十人に行なった。その中にあの人がいた。そして、全員を見終わって俺は部屋をでた。

「へーそれでは、私が命じられた人を発表させていただきます。ジヨゼットさんです」

「え？わたし？」

「ええ、あなたが私が探していたお方です。すぐに連れては行きませんし、本人が嫌だつと申されるのならそれもいたし方ありません。私は10日間はここにいますので、気持ちは落ち着いたらお伝えください」

「わかりました・・・」

それから10日間色々なことがあった。他の少女達に世界の事を聞かれたり、魚を取りに行ったりして時間をつぶしていた。

—————

そして10日目

「決めました、キッドさん。私、父さん母さんのところに帰ります」
「・・・そうですか、わかりました。それでは準備してください。
今日の昼には出発したいと思います」

準備をしている間に、修道長に話をしているうちに昼になった。

「ジヨゼット、元気だね。帰ってきてお話聞かせてね」

「うん。皆元気だね」

「では、参りましょう」

「はい」

ヴァルに乗って修道院を出た。ちょうどいい高度になったところで俺は、これからの話を始めた。

「私はこれからどこに行くんですか？」

「あなたはオルレアン家に行くのですよ。姉さま」

「え？ ねえ・・・さま？ どういうこと？」

「すいません黙っていて、しかし仕方なかった。俺だって嘘はつきたくはなかった。これが一番だと思ったからこんなことになってしまいました。すみません姉さま」

少し悲しそうな顔をしてうつむいてしまった。

「しかし、父上と母上は本当にあなたの帰りを待っているのです。

姉さまをあの場合に送ったことを深く後悔したのですから」

「わかった。私には、あなた以外に姉弟はいるの？」

「はい。姉と弟がいますよ姉さま」

そんな話をしながらガリアの空を移動した。家に着いたら、本当のことを話そう。俺とヒロキのことを、本当の秘密を・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1029i/>

雪風と氷結

2010年10月24日13時43分発行